ちょっとブレイクしませんか?

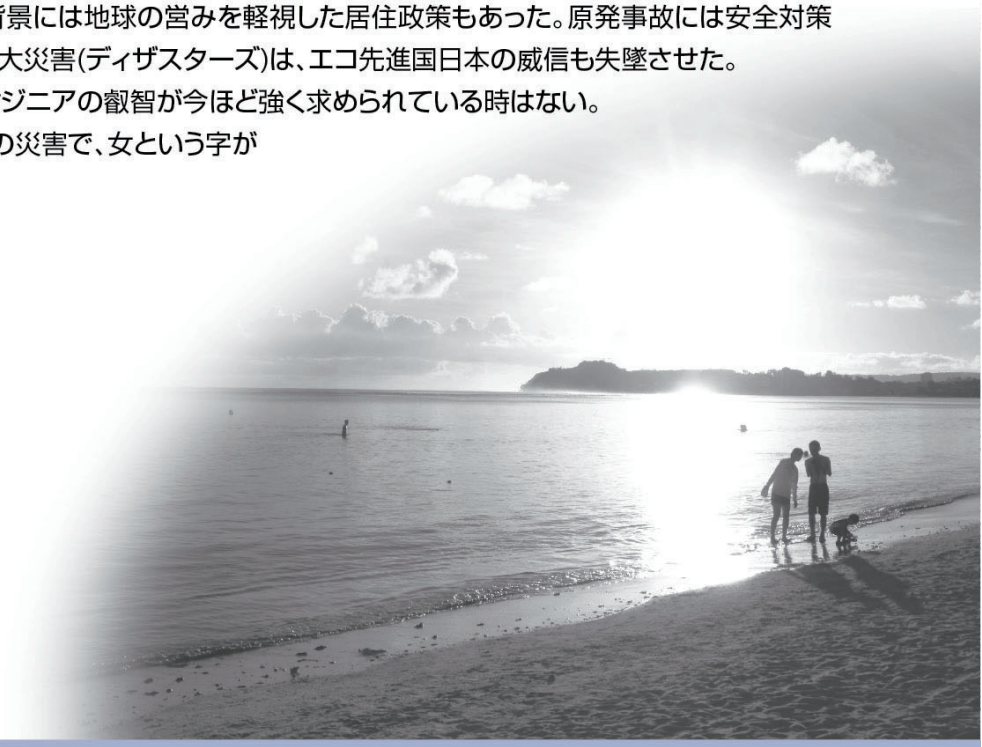
チャイナ・シンドローム【1979年】

第11回

イソップ寓話集に「遭難者と海」と題する小話がある。「難破して浜辺に打ち上げられた人が、疲れきって眠っていた。やがて起き上がり、海を見やると、海は穏やかな様子で人間を誘(おび)き寄せるが、迎え入れた後で、荒れ狂って滅ぼすと、言って非難した。すると海は女の姿になって彼に向って言うには『そこの人、文句は私ではなく風にいいなさい。私は生まれつき、そなたが今見る通りの姿。風が突然襲いかかり、私を波立たせ荒れ狂わせるのです』」

広島・長崎の原爆から34年目の1979年の映画「チャイナ・シンドローム」(米国)公開後の12日目にスリーマイル島原発事故が発生した。テレビのキャスター、キンバリー(ジェーン・フォンダ)はカメラマンのリチャード(マイケル・ダグラス)と取材に赴くが、リチャードは制御室の撮影を禁止された。その時突然震動が起こり大騒ぎの制御室で技師のジャック(ジャック・レモン) が冷静に指示を与える。やがて、放射能漏れが判明、原子炉緊急停止の命令が出される。その様子をリチャードが撮影。キンバリーは早速プロデューサーに報告したがスクープ報道を制止される。運転が再開された原発で不安を抱いていたジャックはかすかな震動を感じ、原子炉を調べにいった。やはり、ポンプの一つに漏れがあった。リチャードの撮った写真を見た物理学者は、もう少しでチャイナ・シンドロームになるところだったと断言。ジャックは写真をキンバリーに渡し、キンバリーはテレビ報道する。

3月11日に発生したマグニチュード9.0の東日本大震災は、太平洋プレートを5mも押し上げ、日本列島を東に1m移動させ、地球に自転速度を1/180万秒速めた。そして福島原発の炉心溶解を引き起こし、巨大津波で3万人近い人命と5万戸を超える家屋を破壊した。海のお蔭で今日の我々の命が誕生し、海の幸はわが国の食生活を支えてきた。呪いたくなる巨大津波の主役となった海。しかし、海に津波を演じさせたのは地殻変動という黒幕がいたのだ。冷静に考えると、大災害の背景には地球の営みを軽視した居住政策もあった。原発事故には安全対策の怠慢もあった。今回の三重(トリプル)大災害(ディザスターズ)は、エコ先進国日本の威信も失墜させた。
モノづくりニッポンの再興・新生に、エンジニアの叡智が今ほど強く求められている時はない。
それにしても、女川原発、小女子、今回の災害で、女という字が
目につくのは、一体なぜだろう。



精神科医・映画評論家
粥川(かゆかわ)　裕平(ゆうへい)

国立大学法人名古屋工業大学
保健センター長
大学院産業戦略工学専攻教授